

住化・住武相談室だより

第7号 7月12日

発行 住友化学・住化武田農薬

お客様相談室 0120-677-088

発行責任者 古津 昇

目次

社長就任のご挨拶	……	p.1,2
安心・安全の農薬使用のために	……	p.2,3
IPMの現状と今後(シリーズ)	……	p.4
雑草よもやま話(7)	……	p.5
市場情報NO.5 夏野菜「キュウリ」	……	p.6
農薬あれこれなぜなにコーナ	……	p.7
今月の推進農薬		
「夏野菜の病害対策について」	……	p.7,8
今月の相談内容から	……	p.8,9
知って得する防除の仕方	……	p.9
誰にでもできる楽しい野菜作り		
ハクサイについて(1)	……	p.10,11
病害虫発生情報	……	p.12,13
登録情報	……	p.13
コラム・そば談義	……	p.14
編集後記	……	p.14



社長就任のご挨拶

住化武田農薬(株) 取締役社長 田代 茂喜

平素は、弊社の製品及び住友化学の製品に格別のご支援、ご愛顧を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、私は6月の弊社定時株主総会及び取締役会において社長に選任され、就任致しました。日本の農薬業界を取巻く事業環境は輸入農産物の増加、消費者の減農薬作物志向、系統流通の変動、新製品上市の加速化と製品間競争の激化、さらには原油高によります各種原材料価格の高騰など、依然として厳しい事業環境が続いている状況下で、経営を引継ぐことの責任の重さを感じております。



2002年11月の住友化学株式会社と武田薬品工業株式会社との合併会社発足以来、「統合シナジー効果の早期実現による、強い農薬事業の再生・飛躍」をスローガンに、弊社は住友化学との完全統合に係わる諸施策

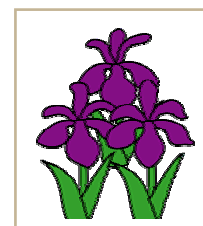
を鋭意取り組んで参っております。会社設立後2年半が過ぎ、事業展開を本格的に加速できるか否かの正念場を迎えております。両社にとってメリットのある機能から漸次統合するとともに、弊社から住友化学アグログループへの出向者、また住友化学から弊社への出向者も相当数になりました。会社の歴史や風土は異なっておりますが、仕事に係る創意工夫、勤勉さ、情熱等においては両社ともほとんど差がなく、熱気に満ちた職場環境が形成されております。そして、7月から2007年11月の完全統合を睨み普及部とサプライチェーン部を新設した新組織体制で事業活動を行っております。各

組織の機能をフルに発揮して事業展開を本格的に加速するとともに、ベクトルを合わせ、切磋琢磨しながら両社の強みを発揮することにより、市場ニーズを的確に捉えた新製品のタイムリーな開発と上市、お得意様のニーズを的確に捉えた業界ナンバーワンのサービスを提供できる会社を目指します。

今後とも社員一同コンプライアンスを徹底しつつ、社業発展のため一丸となって頑張る所存です。皆様方のご指導、ご鞭撻を何卒宜しくお願い申し上げます。

以上

安心・安全の農薬使用のために 残留農薬分析の数値から考えること



収穫物や市場の商品の残留農薬分析をすることが多くなっていますが、残留農薬分析を実施する時の注意点について説明します。

農薬登録のために行われる作物残留試験法は農林水産省が指針を示しています。いくつかの品種が含まれる作物、地域により異なる作型、施設栽培か露地栽培かなどの条件から、農薬がいちばん残留しやすい栽培条件が選ばれて試験が実施されています。分析用サンプル（収穫物）も圃場全体の平均値が得られるように統計的に複数の場所から採取しています。分析に使用する作物の部位は厚生労働省の告示の中に分析方法と共に示されています。一般的には、小売店の店頭に並べられる状態で分析していますので、野菜・果物などは洗浄せずに用いられます。

出荷前などに確認のために残留農薬分析を行おうとする場合は、前述の指針等に従ってサンプリングしないと、圃場での平均値を正しく把握することはできません。また、分析に用いる部位についても告示と同じ部位を用いないと残留基準値との比較はできません。このように細心の注意を払って行われた分析の結果、異常な数値が得られた場合には、農薬の使用方法をはじめとする全作業の確認を行います。そのために、作業実態について記帳しておくことが重要です。

次に、基準値を越えてしまった場合、その作物を食べることが人体にどの程度の影響を及ぼすか考えてみます。ご存知のようにADI（一日摂取許容量＝生涯毎日食べ続けても健康に悪影響が出ない量）は動物を用いた長期毒性試験で得られた無毒性量に

安全係数をかけて求められています。一方、厚生労働省の国民栄養調査によって、国民一人が一日あたりに摂取する作物ごとの量（フードファクター）が発表されています。

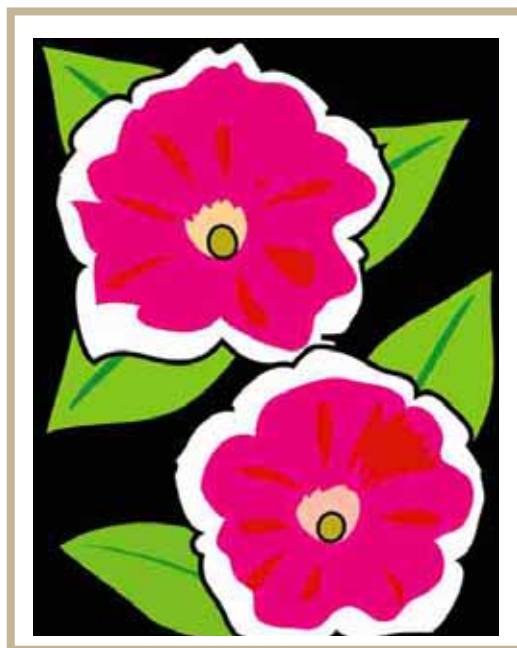
企業が登録申請をする際に、どの作物を適用作物とするかは、その農薬にとって優先度の高い作物（効果、市場性など）から順に、その作物から摂取しうる農薬の最大量を残留データとフードファクターから計算していき、ADIの80%を超えない範囲までで適用作物が決められています。つまり、適用作物すべてに、使用基準にある最高の濃度（量）・回数で使用したとしても、ADIの80%を超えないように適用内容は決められています。

通常はひとつの農薬が、日本中に栽培されているすべての適用作物に使われることはありませんし、いちばん残りやすい栽培条件で使用条件いっぱい使用されることもありません。さらに、残留分析が行われる作物の状態から、皮などを除いたり、洗浄や調理などが行われるため、実際に口に入る残留農薬は分析時に比べかなり減少して

います。厚生労働省がまとめた農薬一日摂取量調査では、通常の食生活において人が摂取している農薬の量は微量であり、ADIを越えて農薬を摂取することはなく、通常、農薬の摂取量はADIの数%程度か、それ以下と報告されています。

食品衛生法に基づいて、基準を超えた農薬を含む農作物は販売することはできません。一方で、基準を超えた農作物が出荷されてしまい、それが一般消費者の口に入ってしまう事例もなくはありません。そのような残留農薬の影響ですぐに健康被害が生じるものではないと言われてはいますが、基準を超えた農作物が一般消費者の口に入らないようにすることが、農作物の生産者の義務です。

農薬使用基準は、それを守ることによって残留農薬基準を超えないように定められており、農薬ラベルに記載されている内容を守って農薬を使用し、安心できる農作物の供給に努めていただきたいと思います。



IPMの現状と今後(シリーズ)

【露地作物のIPMに交信攪乱剤を利用する事例 - 果樹の例】

果樹類は、病害虫の種類が多いため、これらに効果のある薬剤をスケジュール的に散布する防除体系が一般的なものです。

特に落葉果樹類は、直接果実を加害する害虫(特にシンクイムシ類やハマキガ類)が、年に数回発生するため、それらの防除に数回の農薬散布を要するのが普通です。ところが近年、これらの害虫に有効な新しい技術、交信攪乱剤の利用が試みられ、地域によっては従来の防除体系が大きく変わりつつあります。

交信攪乱剤の利用は、害虫の生態を逆手に取ったきわめてユニークな防除方法といえます。多くの蛾の雌は普通、雄より後に羽化し、雄を誘引し交尾するために、性フェロモンという物質を空中に放出します。雄はこの匂いをその触覚でかぎ分け、雌のもとに飛んできます。そこに人工的に合成された性フェロモンが充満していると、雄成虫はどれが雌成虫のものかわからず、結局交尾できないため雌は受精卵を産めず、次世代の蛾は誕生できなくなります。現在、交信攪乱剤として信越化学から果樹類のシンクイムシ類やハマキガ類をはじめ、茶のチャハマキやチャノコカクモンハマキ、野菜のコナガやヨトウ類、オオタバコガ類などの合成性フェロモンを含有した製品が開発され、果樹を中心に全国で約20,000haの面積で利用されています。ただし、一般にはフェロモンが充満しやすい条件(平地で風が弱い地域で、数ha規模以上で処理)での処理が望ましいといわれています。

ところで、交信攪乱剤を利用するようになった果樹園は、従来と比べ害虫の発生パターンに変化がみられるようになりました。



(果樹でコンフューザーを使っている写真)

特に大きな変化は、今まで必ず数回の薬剤防除を要したハダニ類の発生量が大きく減少したことでした。これは交信攪乱剤が従来の殺虫剤散布にとって変わったため、土着のハダニの天敵類(特にカブリダニ類)が結果的に保全され、害虫であるハダニの多発生を抑制するようになったためと考えられています。一方、マイナスの例ですが、従来の防除方法では問題とならなかったカイガラムシ類やりんし目害虫が発生するようになり、これは薬剤防除が減ったため従来なら同時防除されていた害虫が復活したためと考えられます。

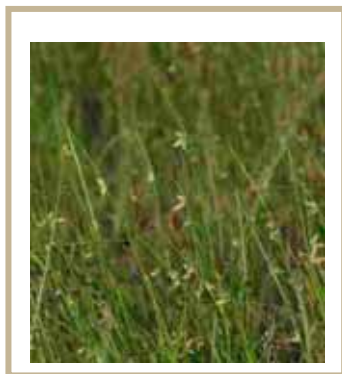
同じような事例は、実は施設IPMの現場でも知られています。たとえば、高知県では、IPMの体系が定着した施設で、土着の天敵類が多数観察されるようになったと同時に、以前は問題にならなかった病害虫(黒枯病やコナカイガラムシ類、チャノホコリダニなど)も出現するようになりました。そのため、これらの現象は、防除体系の変化にともない病害虫の種類も変化する可能性を示唆しており、現場でIPMを構築していく上で留意すべき点にもなっています。(H・M)

雑草よもやま話(7)

わが国の水田で防除が問題となっているホタルイ属植物は、ヒメホタルイ、コウキヤガラ、シズイなどのほか、雑草防除上“ホタルイ”と呼ばれている植物があり、この“ホタルイ”が最も広域的に問題となっています。

しかし、このいわゆる“ホタルイ”は植物分類学上ホタルイと命名されている植物そのものではなく、ホタルイと外部形態が類似しているホタルイ属植物の総称です。ホタルイと外部形態が類似している植物には、イヌホタルイ、台湾ヤマイ、ミヤマホタルイ、コホタルイがあります。

そこで、水田で防除が問題となっている“ホタルイ”の草種を明らかにすることを試みたところ、イヌホタルイが最も雑草としての形質に優れ防除が難しく、次いで台湾ヤマイの順になりました。真正のホタルイは雑草としての特性が劣り、除草剤に対する感受性が非常に高く、市販されている多くの除草剤で容易に枯殺できることから、防除の対象となっている草種とは考えられませんでした。また、各地の試験研究機関から送られた“ホタルイ”の種子を



栽培して同定したところ、イヌホタルイはすべての機関の種子で認められ、台湾ヤマイとコホタルイが僅かに認められましたが、ホタルイは認められませんでした。真正のホタルイの生育地を調査したところ、

湿潤で土壌の攪乱や除草剤の施用がない休耕田やその畦畔で、ホタルイにとって日当たりの良いところに発生していました。

以上のことから“ホタルイ”として問題となっている草種は主としてイヌホタルイであり、ホタルイは水田ではほとんど発生しないが、発生して

も種子を生産するには至らないと考えられました。なお、東北地方の水田において台湾ヤマイが優占化している事例が報告されており、台湾ヤマイも“ホタルイ”を構成している草種といえます。近年、スルホニルウレア系除草剤に抵抗性を持つイヌホタルイや台湾ヤマイが出現し、いわゆる“ホタルイ”の防除をより難しくしております。

(I・K)

群馬大学社会情報学部青木繁伸様より、写真提供をうけました。

市場情報 NO.5**夏野菜「キュウリ」・・・その2**

日本エコアグロ㈱ 農産商品部 大家 修

§ キュウリの種類 §

その昔、キュウリは早くから採れる夏野菜として知られ、多くの在来種がありました。

その中には、各節ごとに着果する節成りキュウリ、果実の長さが30センチを超える長大種（例えば「金沢太」）、地面に這わせる地這いキュウリなどがあります。また品種改良により、果実の形や色、肉質、風味にも特徴のある多くの品種が作られました。

その後、流通をスムーズにしたいという生産者サイド、販売店サイド双方の思惑もあり、果実が強健で形の整った、100g前後の小型果が主流を占めるようになってきました。しかしながら、形、色、光沢こそ良くなったもののキュウリ本来の味や香りが薄まってしまった感は否めませんし、その用途が生食用と漬物用に限られていたこともあって、人気は下降傾向を辿ってきました。

ところが数年前から、外観にとらわれない本物のキュウリを求める消費者の声に応えるように、「四葉キュウリ」や「ブルームキュウリ」に注目が集まっています。

「四葉（スーヨー）キュウリ」（当社扱い）華北系の品種。長さ40センチ前後、白イボでちりめんのよう果皮表面に皺があります。歯ごたえと香りの良さが売りで、明治後半から大正にかけて登場し人気の高い品種でしたが、日持ちが良くなかったため、次第に市場から消えていきました。ところが最近になって、昔ながらの味わいを求めるかのように再び市場で静かなブームを起こしています。厚い果肉の歯切れの良さと香りは絶品！さらに皮が薄いため漬物にも向いており、冷やし中華等の具材としても美味しいと評判です。

「ブルームキュウリ」（当社扱い）

キュウリやブドウなどの表面にうっすらと白い粉を吹いたような果粉のことをブルームと言いますが、正確には毛の一種であり、表皮細胞が分裂を繰り返して白く変化したもので、作物の水分の蒸発を抑えたり、水をはじいたりして果面を保護する蠟物質です。最近では、ブルームの出ない接木台木が見つかったことから、果実の見栄えや日持ちの良さを考慮してブルームレスキュウリが主流になっています。反面、ブルームレスの場合、どうしても果皮が硬くなり、肉質が柔らかくなる傾向があります。その点、「ブルームキュウリ」は食感が良いため、漬物やサラダのような生食用にぴったりの野菜といえます。果皮が柔らかく、緻密でしっかりした肉質を持ち、歯切れが良く、キュウリ独特の香りもあります。加えて栄養価も高い野菜であることは意外と知られていません。

(続く)

群馬大学社会情報学部 青木繁伸様より(写真)提供をうけました。





希釈の仕方を教えて ください?

ご質問

家庭菜園できゅうりを育てています。アブラムシがつくので、スミチオン乳剤を買ってきました。きゅうりのアブラムシには、1000～2000倍で薄めて使うと書いてありますが、こういうことに慣れていないので、感覚的にわかりません。どうやって希釈をすればいいのでしょうか。また、1000～2000倍というのはどうして希釈倍数に幅があるのですか？それからよく見ると、有効成分MEPは50%しか入っていないようですが、1000倍希釈での効果を期待するなら500倍で希釈するべきでしょうか？

お答え

1000倍に薄めるというのは、1mlの薬を1L(1000ml)の水に溶かすことです。また、水和剤などの粉の場合は1gの薬を1000gの水、すなわ1Lの水に溶かすこととなります。2000倍なら1ml(又は1g)を2Lの水に溶かします。1000倍～2000倍と幅があるのは、この間であれば効果的にも作物の安全性の面からも問題がないということです。例えば、虫の発生が多い場合には、濃い濃度の1000倍で、虫が少し見え始めた程度であれば、2000倍といったように、その時の状況で選択できるようになっております。

農薬には有効成分が表示されていますが、使用される時にはこの含量には関係なく、その商品自身を上記で述べた要領で薄めてご使用ください。

(I・T、S・H)

今月の推進農薬

夏野菜の害虫対策について

【パダンSG水溶剤・エスマルクDF・プレオフロアブル】

3～4月にキャベツ・はくさい・レタスをは種すると、4～6月が定植となります。

7月～8月収穫のキャベツの作型は、北海道・東北・群馬(嬬恋)・長野で150,000ha、はくさいは群馬(嬬恋)・長野で2,300ha、レタスは北海道・東北・長野で8,000ha作付されています。

この時期(5～6月)のキャベツ・はくさ

いを加害する害虫は、アブラムシ類・アオムシ・コナガ・ヨトウムシなどです。防除としてまず、定植時のケラ・ネキリムシに土壤混和处理(ダイアジノン粒剤5)とアブラムシ類の防除で定植時処理(オルトラン粒剤など)が必要です。生育期の防除はコナガが重要です。抵抗性対策の必要からローテーション防除が必要です。例えば、

有機リン剤（サイアノックス乳剤）、カーバメート剤、ネライストキシシン剤（パダンSG水溶剤）、IGR剤、BT剤（フローバックDF・エスマルクDF・ゼンターリ顆粒水和剤）、合ピレ剤（アグロスリン水和剤・アディオン乳剤）等があります。更に住友化学から新しいタイプのプレオフロアブルが登場してローテーションの選択の巾が広がりました。

レタスでは定植前にネグサレセンチュウの防除（ボルテージ粒剤）、定植時処理（ダイアジノン粒剤5）と生育期のアブラムシ防除（ダントツ水溶剤・アグロスリン乳剤・ベストガード水溶剤・アディオン乳剤）が必要です。特に、防除の困難なヨトウムシやハスモンヨトウやオオタバコガ等の大型りん翅目害虫は結球初期に1週間毎に若令幼虫の徹底防除（プレオフロアブル・フロ

ーバックDF・エスマルクDF・ゼンターリ顆粒水和剤）が必要です。ナモグリバエの防除は育苗期後半の株元処理（ベストガード粒剤）や、生育の防除（パダンSG水溶剤）が被害防止の上で重要で品質向上が図れます。（NT）



今月の相談内容から

パダンSGのカキノヘタムシガの防除について？

質問

カキノヘタムシガ（カキミガ）により幼果がポタポタと落ちるが、散布適期はいつ頃ですか？

回答

カキノヘタムシガの発生は暖地で2回発生します。

発生時期（発蛾最盛期）は第1世代が5月中下旬～6月中旬、第2世代が7月中下旬～8月中下旬です。産卵は、果梗部、葉柄、新梢などに産卵し、ふ化幼虫は一度芽を食害した後、移動し果実のへた部から食入します。防除適期は発蛾最盛期から10日後で、第1世代は5月下旬～6月中下旬。第2世代は8月中旬ですが、第2世代は発生の期間が長く被害が甚大です。又、天候により発生時期に変動があります。東北地域では発生は1回で、7月下旬～8月上旬が防除適期です。防除薬剤は、アザミウマとの同時防除を狙う場合はパダンSG水溶剤。カイガラムシとの同時防除ではスミチオン乳剤・水和剤があります。（NT）



スミチオン乳剤のカミキリムシ防除について？

質問

昨年、いちじくの木に穴があき木屑が出ていました。カミキリムシと思われるが防除方法を教えて欲しい。

回答

樹幹に食入する害虫は、カミキリムシ類・コウモリガ・ヒメコスカシバ等が加害しますが、いちじくではキボシカミキリとクワカミキリとアイノキクイムシが加害します。

特に樹勢が衰弱した樹はキボシカミキリの被害が多くなります。キボシカミキリの成虫は6月上旬に、クワカミキリは6月下旬に飛来し葉や新梢を食害して卵巣生育後産卵します。産卵部はキボシカミキリが樹幹・主枝部にクワカミキリが新梢の基部に行います。産卵期間は4ヶ月に及びますがピークは7月中旬です。

防除方法は産卵最盛期のふ化食入防止を目的として行い、塗布又は散布します。「ガットサイドS」はいちじくでは4月～7月に株元から結果母枝まで産卵部に原液を刷毛で塗布します。食入防止と産卵抑制及び日焼防止の白色塗布剤としても好適です。食入した幼虫は食害部位を見つけてキリ等で刺殺します。(NT)

群馬大学社会情報学部青木繁伸様より写真を提供をうけました。

**知って得する防除の仕方****ニラの防除時期の考え方について**

5月のご相談で、「にら」で最も相談の多い薬剤はバリダシン液剤5で、内容は「刈揃え前まで」の具体的な時期について教えてほしいという質問です。

登録内容が、葉腐病に対して「刈揃え前まで」と記載されていますが、収穫前日数が書かれていません。「にら」の葉腐病はリゾクトニア菌による病害ですが、最近急速に被害の様相を示してきました。多発条件は8月上旬～9月下旬の株養成期間中の高温期に強い風雨で病害部からニラ

葉に土壌が跳ね上がり、付着部から病原菌が侵入します。感染株はその後の生育が劣り、株育成が不十分のため新しく伸びた葉の収量・品質が著しく低下することになります。

防除対策は「バリダシン液剤5」がリゾクトニア菌・白絹病菌に有効です。養成株の刈揃え前までに、800倍を散布(3回以内)をします。そして刈取後に生育した葉を収穫します。各刈揃え前まで(捨て刈前まで)に使用できます。収穫する葉には散布できません。葉腐病の症状は外葉基部が水浸状の病斑を生じ、葉が垂れ下がり葉腐れ症状を示しますので、上手な防除は「にら」の外葉基部の水浸症状が認められたら直ちに株全体に十分量を散布します。高温多湿条件下で強い風を伴った降雨で感染・多発生しますので、降雨後直ちに散布を開始して下さい。(NT)



ニラの葉腐病

ハクサイについて(1)

秋どりハクサイの栽培法(7月末から9月始めは、秋どりハクサイの種まきシーズン、良いハクサイを沢山収穫しましょう)

1 ハクサイのルーツを知ろう

1) 原産地とわが国への渡来

原産地は中国北部<当初は半結球性のもの>北京付近・山東半島中心に発展。明治8年に勸農寮内藤新宿試験場で栽培(結球山東白菜・愛知白菜の起源)。採種しても他の葉菜類と交雑して採種困難から普及しませんでした。

2) 戦争がきっかけで導入

日清(1894・1895)日露(1904・1905)の両戦役に従軍した兵士が国内に持参。当初は他の菜類と交雑して種子が雑パク化。隔離採種の方法が解決してからは全国に普及。仙台伊達耕種園 沼倉吉兵衛、宮崎洋行、青島総領事館の努力。現在の中国では紹菜(タケノコ白菜)が多く見られます。

3) ハクサイの品種分化(基本品種)

愛知県に土着した山東系早生(愛知県早生白菜に発展)。葉重型の典型。城県に土着した芝罘(チーフー)ハクサイ、これから育成された松島白菜、葉数型の典型。暖地に土着した晩生放頭連、代表的な雲仙ハクサイ。芝罘×放頭連で葉数葉重型の加賀白菜を松下仁右衛門が育成。京都に渡り、典型的な日本標準品種「京都3号」となりました。

2 各種障害克服へ新品種の育成

1) 初期の耐病性品種の育成

戦後の元祖下山千歳(芝罘×放頭連)=ウィルスに強。農水省育成種の平塚1号(合成ナプス=ハクサイ型K2-2×松島新2号を交配→後代固定。

2) 耐病性品種でなければ栽培困難な現在のハクサイ栽培

軟腐病・ウィルス病・根こぶ病・白斑病などハクサイは病害の巣窟です。捲心は軟腐病には強いがウィルスには弱い。ウィルス(モザイク病)は同じ地方でも地域で大きな発病に差。新潟市の濁川は良くできて阿賀野川を隔てた大形では栽培しても良くできません=有翅アブラムシの生育に大きな差があります。

根こぶ病はカブに由来する抵抗性素材を利用=C R系品種。

3) 今流行の黄芯(中身が黄色のハクサイ)品種

当初は結球葉の固い品種が多かったが、現在は大きく改善。根こぶ病抵抗性も次第に常識化。有名3社の推奨品種。



写真1. 松島交配「黄皇(きこう)85CR」



写真2. タキイ交配「黄ごろ75」 写真3. 柿沼交配「スーパーCR黄味85」

(I - 農力掲載の肥料部資料より)

病害虫発生情報

6月～7月上旬に各県から出された病害虫注意報・特殊報から主要なものをお知らせします。

水稲（鹿児島県は早期）

斑点米カメムシ類：福井県、鹿児島県

イネクロカメムシ：三重県

粒剤で防除できるダントツ粒剤、散布剤のスミチオン、ダントツ粉剤・水溶剤などの薬剤で、徹底した防除に努めてください。

かんきつ

かいよう病：和歌山・広島・山口・愛媛・佐賀・熊本・鹿児島県

バリダシン液剤をローテーション防除の一剤に加えた防除を実施してください。

かんしょなど

アワダチソウゲンバイ：三重・京都・徳島

登録薬剤はありません。



アカスジメクラカメ

茶

チャノコカクモンハマキ（写真）：静岡県

ロディー乳剤やエスマルクDFなどで防除できます。

ミカントゲコナジラミ：京都府

茶での本害虫の登録農薬はありません。

カンザワハダニ：福岡県

ビルク水和剤、ボルテージ乳剤、粘着くん液剤などで防除できます。

チャノキイロアザミウマ：長崎・宮崎県

ダントツ水溶剤、ロディー乳剤などで防除できます。

クワシロカイガラムシ：長崎・宮崎県

スミロディー乳剤などで防除できます。

チャ斑点細菌病（仮称）：鹿児島県

本病害での登録薬剤はありません。



きゅうり

黄化えそ病：埼玉・愛知県

ミナミキイロアザミウマにより媒介されるウイルス病です。ダントツ水溶剤、アグロスリン水和剤・乳剤、ベストガード水溶剤でアザミウマの防除を徹底してください。

いちご

イチゴ角斑細菌病：滋賀県

バリダシン液剤で防除してください。

トマト（・ミニトマト）

トマト黄化葉巻病：岡山・宮崎・鹿児島県

シルバーリーフコナジラミにより媒介されるウイルス病です。ダントツ粒剤又はベストガ

ード粒剤の定植時処理と、生育期のダントツ水溶剤、ベストガード水溶剤、スミロディー乳剤等で防除を徹底してください。

メロン

すいか果実汚斑細菌病による病害：北海道、茨城県
すいかでは、過去アメリカで大発生して問題となっている病害です。(写真)

日本では、平成10年に初めて確認され、本年熊本県でも確認され特殊報が出ています。種子で伝染するので、保菌種子が第1の伝染源になり、接ぎ木や摘心などの管理作業や、頭上灌水や雨滴により病原細菌が周囲に飛び散り、二次伝染します。

今回メロンでも発生が認められたことから、今後メロン・すいかでの重要病害となる可能性があります。注意が必要です。



(I・T)

登録情報

6月22日付で適用拡大されました。

新規登録「粘着くん水和剤」

【現在上市に向け準備中】

かんきつ：ミカンダニ、アブラムシ類

りんご：ハダニ類、アブラムシ類

なし：ハダニ類、アブラムシ類

いちじく：カザリダニ

新規登録「ミドリヒメ」

【現在上市に向け準備中】

野菜類：ハモグリバエ類

フローバックDF

にんにく：ネギコガ / 1000倍 / 発生初期但し収穫前日まで / 4回以内 / 散布 以下

コラム・そば談義

先日、香川県から保母の研修を兼ねて妹が上京して来た。

妹と言っても、五十を過ぎた三児のオバサンだ。今まで一人で遠くに行ったことがないのか、東京駅から我が家まで色々な人に道順を尋ねてやってきた。また、帰りは女房に東京駅まで見送りさせたぐらいだから、いかに旅慣れていないかよく分かる。

さて、兄である私は我が家に来た時くらい何か食わせてやろうと思い、帰る日に朝早くそばを打って食べさせることにした。その前夜、「そばを打ってやるから食べへんか」と言ったとき、最初の返事は「アンちゃん無理せんでええよ」だった。要は、あんまりそばを食べたくないのである。讃岐の人はうどんなら毎日でも食べるが、めったにそばは食べない。彼女もご多分に漏れず蕎麦では食欲をそそらないのである。まあ、それでも「たまにはえやないか、食べてみいや」となだめて食べさせたのである。

そして、食後の感想は、打ちたて茹でたての蕎麦は美味しいと思ったのか「また食べたい」と言って蕎麦湯まで飲んでくれた。そこで、やっと兄として面目躍如となり、私自身大いに満足したのである。

しかし、五十肩でここ暫く思うように体が動かせなかった。趣味のテニスとそば打ちが思うように出来ず少々気持ちが落ち込んでいたが、やっと腕が上がるようになってきた。先日、広告関係の方に蕎麦の話をしたところ「江戸ソバリエ」講習会というものがあり参加されたらどうかとか、弊社本部長から蕎麦の全国大会があるが挑戦してみたらどうかなどと、ありがたいことに色々と気遣って頂く。

そんな訳で、人を喜ばすにはチョットした相手への気遣いが出来るかどうかと思う。そこで、相談室に電話頂くお客様にも自分なりにチョットした気遣いが出来るよう心掛けて行きたい。 F・N

[編集後記]

今年も異常気象の影響なのか梅雨の時期になっても九州・四国地方は日照り続き夜間断水した地域があった。しかし、ここに来て九州などが集中豪雨でかなり被害が出ている。なかなか、思うように天候はいかないものである。

さて、そろそろ梅雨明けも間近となり、全国的にスカッと開けて欲しいものだ。ところで、今月からお客様相談室が所属する「パブリックリレーショングループ」が新しく出来ました。このグループは農薬の技術的な説明や安全性などを含めて、より一層お客様に満足して頂けるように体制を整えてきました。

今後、このグループがより一層お客様の立場に立ち、満足と安心をお届け出来るようグループ全員で一步一步進んでいきたいと思えます。

表紙の挿絵「サラサドウダンツツジとピンズイ」 技術顧問 富樫氏作